

模倣による商売：美濃伊賀と美濃唐津（17世紀初頭）

織部が隆盛を極めた頃、京の都の茶室では他にも2つのやきものがあった。それは、三重県の伊賀焼と佐賀県の唐津焼であった。美濃の陶工たちは、この競争の中で、地元の素材を使ってこれらの流行のスタイルを模倣した。こうして作られたやきものは「美濃伊賀焼」や「美濃唐津焼」と呼ばれた。このようにして、地元の陶工たちが市場の需要に対応できたことで、美濃はやきもの生産の中心地としての地位を確立することができた。

美濃伊賀焼は、志野の釉薬の主成分である長石を多く含む粒状の粘土を使用している。高温の薪窯の中で、長石が木灰と反応して、伊賀の有名なビードロ釉に似た自然な緑の釉薬が作られる。この水指に代表されるように、アシンメトリーで自然な荒々しさが茶人に好まれた。美濃伊賀焼の特徴である、エッチングされた線や「耳」と呼ばれるくびれた持ち手も、美濃伊賀焼の特徴である。

美濃唐津焼は、唐津焼と同様に鉄分の多い粘土を使用しており、粗すぎず土の感触を残している。また、さまざまな釉薬が使われている。この碗は美濃唐津焼の代表的なもので、半透明の灰釉の下に黒の鉄絵具で葉や花などの自然のモチーフが描かれている。